

社会化とフェミニズム

渡辺 秀樹

1. 社会化システムと母親

「近代社会における家庭教育の全責任と権限は母親に移ったといってもよからう」

（牛島義友 1955, 210頁）

職住分離型生活と性別分業型家族が、近代産業社会の支配的な類型となるにおよんで、近代の家族は、そしてより限定的に表現すれば、近代の母親は、子どもの養育を独占的に担う位置を占めることとなった。

「母親が養育役割を独占的に担う」ということの意味は、複合的である。まず第1に、養育役割の家族外社会からの剥奪である。いいかえれば、養育機能が共同体に埋没している状態から、養育機能を共同体から剥離し、家族へと〈籠城〉（沢山美果子 1990, 109頁）させていく状態への変化である。第2に、拡大家族成員（祖母やオバなど）の養育役割の減少、さらには核家族の成員である父親（夫）の養育役割の喪失、すなわち家族内部における母親以外の養育役割の担い手の喪失である。つまり、母親と子どもを囲む境界の現出である。第3に、成人女性の母親役割への囲い込みである。それは単に専業主婦として子育てに専念する女性の登場ということだけではなく、母親という規範（〈母性〉）へと女性を拘束するということの意味する。

養育役割が社会から離れ、そして母親以外の家族成員から離れた。そして女性にとってのアイデンティティ基盤として、母親役割が唯一肥大化した、ということである。こうした近代社会の養育構造が形成される歴史的経緯は、この20年来の家族史や

教育史あるいは歴史社会学などの分野の精力的な研究によって明らかになりつつあるが、たとえば、発達心理学や教育社会学においては、この近代社会の養育構造（および規範）を前提とすることによって、家族における社会化や家庭教育や母親が論じられ、研究されてきたといえることができるだろう。

もちろん、こうした近代家族の相対化作業の流れとは別に、すでに深谷昌志（1981）をはじめとする良妻賢母主義教育についての歴史的研究や、同じく家制度研究のなかでの母親の位置づけ、あるいは山村賢明（1971）に代表される文化論的な母親研究の重要な蓄積があったことを忘れてはならない。こうした社会的諸次元の錯綜のなかで、〈母親〉が教育的営みのなかに浮かび上がってきたのだと考えた方がよいだろう。これらの重層的な経緯においてソーシャライザーとしての母親、あるいは養育者としての母親、さらには「教育する母親／コントロールする母親」という概念の社会への定着とともに、教育や発達に関する科学への母親という概念の定着をみることになったといえるだろう（冒頭に引用した牛島義友は、お茶の水女子大学の児童学科創設の中心にいた）。

小論の目的は、社会化機能の家族システムへの委譲（囲い込み）、およびソーシャライザー役割の母親による独占ということの意味を、社会化システムとフェミニズムという切り口から考察することである。つまり、近代社会の養育構造を〈歴史的〉に相対化するという作業ではなく、そうした作業を踏まえたうえで、近代の養育構造がもたらした社会学的帰結について考察すること、仮説的な相対化作業をおこなうことである。すなわち、具体的な歴史的経緯の錯綜や階層的・地域的・時間的ズレや多様性の現実態から、ひとまず離れて、〈論理的〉に可能な社会学的帰結についての仮説的な議論の展開を試みるということである。個別具体的な歴史的研究でもなければ、その単なる抽象化でもない。フェミニズムとは、ここでは、社会学的な理論装置にもとづく、社会の徹底的な相対化とオルタナティブな社会の構築作業を指すものとする。したがって、社会学的帰結とフェミニズム的帰結とは、性／ジェンダーという切り口が社会学の中心的な分析軸として含まれる今日においては、（少なくとも本稿においては）ほぼ同義と考えてよい（Abbott, P., & C. Wallace 1990）。

さらに言えば、フェミニズム理論の重要な特性のひとつである社会の制御（コントロール）という視点を確保することである。10年前、リンダ・ゴードン（Linda Gordon 1986, 70 頁）は20世紀初頭のボストンにおける児童虐待防止協会（MSPCC = Massachusetts Society for Protection of Cruelty to Children）の事例を取り上げ、フェミニズムの視点から社会統制（＝家族統制）を論じた論文のなかで、アメリ

カにおけるフェミニズムの第2の波が、多くは若くて子どものいない女性によって担われたことに大きく規定されて、子どもの問題にあまり手をつけなかった、と述べている。そのことは日本のフェミニズムの理論研究にもいまだあてはまりうるものではないだろうか（もちろん、『母性』についてや『育児』についての日本固有の重要な蓄積は忘れてはならないが）。

本稿の関心の行き着く先は、現代の養育構造あるいは社会化システムについての、実践的な、あるいは政策的な次元にある。社会化システムを所与として、社会化のプロセスを論じるのではなく、社会化システムをコントロールの対象として設定するのである。問題は、家族を所与として母親が子どもをどうコントロールし、そこにジェンダーがどう介在するかではない。あるいは家族をとりまく社会を所与として親子関係をどうコントロールし、そこにジェンダーがどう介在するかもない。社会化のプロセスが生起し、子どもと親そして家族が乗っかっている社会そのものをどうコントロールするかという問題関心である。社会を所与ではなく、操作対象として、変数として議論の俎上に載せるというのが、政策的関心の意味である。

ジェンダーということからいえば、ソーシャライザーにおける母親の独占、つまり一方の性への偏りを指摘するのはいとも簡単ではあるが、ここではそれを越えた議論を試みたいのである。「教育母子家族」の誕生とは何であったか。ソーシャライザーの性的偏り以上の重要な社会学的意味を有していたはずである。社会化状況を所与とする議論の陥穽から脱するためにも、あえて政策的な（＝コントロールという）視点を強調したいのである（「個人的なことは政治的なこと（the personal is political）」という例のフェミニズムの言葉を想起してもらってよい）。

2. 社会システムと社会化システムとの乖離

たとえば先にも参照した沢山（1990）は、教育家族の成立、すなわち小論ではこれを近代の養育構造と呼ぶことにするが、その成立を1920年頃の新中間層に求めた。共同体への参入のための共同体による教育から、共同体から〈籠城〉した家族による、共同体からの離脱のための教育への移行である。沢山は、母親自身による教育論の初発のものとして、その頃出版された鳩山春子と田中芳子の子育ての書を取りあげ、そこに教育家族の誕生の内容を探っている（同上 116頁）。ここで〈籠城〉とは、社会と隔離した家族という囲いのなかで教育をすることを意味する（同119頁）。

ちなみに、「籠城主義」とは田中芳子自身の言葉であるが、沢山が引用する鳩山の言葉「母親が同道し得ない所へは一切遣わさぬ」（119頁）という表現と、先述のリンダ・

ゴードンが描写する、当時のボストンのミドルクラスの規範、これは児童虐待防止協会の基盤となった規範であるが、子どもは母親の付添い無しに、戸外遊びはしないものという規範と符合している。ゴードンによれば、親による児童虐待は1870年代に社会問題として発見され、そして20世紀初頭に、ストリートチルドレンは逸脱と定義されることになったのである（L. Gordon 1986を参照のこと。関連する最近の日本の業績としては戦間期を扱った鈴木智道 1997をあげることができよう）。

鳩山や田中の子育て論は、共同体からの個の解放という側面を持ったが、その解放の射程は我が子にのみ限られたものであり、新中間層に限っても、社会的な広がりのあるものではなく、さらには民衆の教育の排除（共同体の教育の否定）のうえにさえ成り立つものであったと沢山は指摘する（ゴードンが記述するボストンの場合には、MSPCCの規範は、新移住者のコミュニティの教育のしかたや、新移住者にとってはあたりまえの子どもの生活のしかたを否定するものであった）。子どもは、社会（＝共同体）の子どもから、個々の家族の子どもへと囲いこまれたのである。沢山は、この観念を〈我が児意識〉、あるいは私的な子ども観と呼んでいる（沢山 1984, 138頁）。

(1) 参加的社会化の喪失——参入の社会化と離脱の社会化

こうした近代の養育構造への変化について、筆者はこれまでに、ソーシャライザーの拡散（＝家族外社会へと拡がるマルチプル・ペアレンティング）から集中（＝母親による独占）への変化として論じたことがある（渡辺 1988）。子どもの養育担当者の縮小である。しかし、養育者（ここでは養育者とソーシャライザーとはとりあえず互換的に使用している）の縮小という以外に次のような問題群を指摘できるだろう。それはまず、社会システム（society や community＝social system）と社会化システム（socialization system）との乖離という問題である。

共同体への参入のための共同体による教育（そうした社会化の過程や習俗は、しつけの民俗学として、少し古くなるが、原ひろ子・我妻洋 1974に詳しい）とは、子どもが参加する社会システムと、子どもが社会化を経験する社会化システムとが重なっている、同一のものであることを意味する。つまり社会に参加しつつ社会化過程を経るのである。参加的社会化（participant socialization）ということになる。子どもが参加しようとする社会システムのなかで実際に特定の位置を占めるなかから、その位置を占めるに必要な価値や技術あるいは行動パターンを学習すること。職業的社会化におけるオンザジョブトレーニングが参加的社会化の代表的な例となる。農家で、農作業の手伝いをしながら、農業に必要な諸々の行動パターンを学習し、農業従事者に

なっていく過程などが典型例となろう。

他方、共同体からの離脱のための、あるいは社会から隔離した家族による社会化は、これとは異なる。子どもが参加しようとする社会とは離れたところで、いわば予期的に社会化の過程が営まれる。予期的社会化 (anticipatory socialization) である。予期的社会化とは、参加しようとする社会システムのなかに実際に位置を占める以前に、あらかじめそのための準備をする過程を指す言葉であるが、予期的な社会化の機関としての近代の学校と家族とに囲い込まれることで、子どもたちの面前から、参加すべき社会システムが遠ざかったのである。社会化の〈エージェント〉という言葉で、ここで想起していただきたい。社会システムから子どもたちを引き離したうえで、社会化の機能を専門に担う (代行する) 下位社会システム＝社会化システムへと閉じ込めるわけである。

近代化の理念として〈属性 (ascription) から業績 (achievement) へ〉という軸があるが、属性主義社会は参加的社会化に対応し、業績主義社会は予期的社会化に対応することになる。属性ではなく、業績によって参加しうる (参加すべき) 社会システムが決まるのであれば、業績につながる能力を獲得する社会化の過程は予期的なものにならざるをえないだろう。社会システムと社会化システムとが重なっており、遊び (= 予期的社会化) と手伝い (= 参加的社会化)、そしてたとえば徒弟制 (= 同じく参加的社会化) へと連続的な社会化が見られた属性主義社会とは異なり、両者が乖離する業績主義社会では、社会化の過程も不連続にならざるをえない。

前者では、社会化の目標が固定 (たとえば世襲的地位の獲得) しているが、後者では、社会化の目標が不確実 (たとえば職業選択の自由という理念によって、獲得しようとする職業的地位が変数) になっている。諸個人は属性から離脱することはできたとしても、どこに着地するかはそれぞれの業績次第で、まことに不確かなものとなる。人々を属性から引き離すということは、参加的社会化の喪失を必然的に導くものであったといってもよいだろう。参入のための社会化から、離脱のための社会化へと重心が動いたのである。

(2) 予期的社会化と不連続性

社会化過程における〈連続—不連続〉の指摘は、ミード (M. Mead 1928) やベネディクト (R. Benedict 1938) らの文化人類学者によってすでに古くからなされている。産業社会における不連続な社会化過程に対して、サモアなどの非産業社会において連続的な社会化過程が営まれていることを論じたわけである (これについては、山

村健 1966の議論を参照している)。

参加しようとする社会システムの成員となるにふさわしい資質を、参加する前に学習するのが予期的社会化であるから、その不連続性は避けられない。予期的社会化は定義からして、不連続な過程である。それはシステム移行（社会化システムから社会システムへの移行）を必然的に含む。マートンをはじめとした予期的社会化のもろもろの議論は、この不可避の不連続性をいかに縮減するかという問題関心に導かれていた、といってよいだろう。たとえば、社会システムの開放度や獲得すべき役割の鮮明度や、情報の可視性や社会システムの柔軟性、あるいは予期的社会化が生起しているシステム（＝所属集団）と、将来、参加しようとする社会システム（＝準拠集団）との関係などが論じられてきた（R. K. Merton 1957, 訳書 1961, 207～351頁を参照のこと。訳書では、〈予期的社会化〉ではなく、〈将来を見越した社会化〉と訳されており、より意を汲み取った訳と考えられる）。

先述の近代の養育構造における〈籠城主義〉とは、現に予期的社会化が生起している状況としての現にある社会に適応せず、きたるべき未だ見ぬ社会（＝『坂の上の雲』）へと適応しようとするものである。社会化の足場である現実の社会システムを否定し、将来のよりよき社会システムへの移行を見込んだ社会化ということになる。現にある社会システムへの適応を望まない、あるいは拒否するのであれば、社会化は、当該の社会システムから離れて、予期的社会化を専門とする家族や学校に囲い込まれざるをえないのである。

近代化あるいは産業化は、〈将来のよりよき社会システムへの移行〉を現実的な可能性（もしくは幻想）として準備したし、また、そうした志向を要求したのである（マートン自身が、フィラデルフィアの下層ジュイッシュのコミュニティから、ハーバード・ワズプに代表される支配的なコミュニティへと、隔絶的な不連続的移行を経験していることを思い出してほしい）。

ミードやベネディクトの議論は、社会化過程における時間的な、あるいは発達的な不連続性についてのものであった。すなわち、子どもから大人への移行の不連続性である。まったく仮説的な議論ではあるが、多くの非産業社会が子どもから大人への移行の不連続性を儀礼＝〈通過儀礼〉として強調したのは、参加的社会化がまさに連続的でかつ可視的な過程であったがために、成人資格の重要性を社会的に確認する仕組みとして、移行や断絶（＝不連続性や不可視性）を儀式的に作り出す必要があったと考えることもできよう。産業社会においては予期的社会化そのものが不連続性（たとえば、学校システムから職業システムへの移行）を備えたものであり、あえて儀式的に

子どもと大人との断絶を作り出す必要が無かったともいえよう。子ども期の発見とは、要するに子ども期と大人期との不連続性の発見でもあった。

(3) 〈固定〉としての社会化と〈移動〉としての社会化

このようにミードらの主張する不連続性が、時間次元の不連続性、つまり発達過程の不連続性を強調するものであったとすれば、マートンのいう不連続性は、同じくシステム間の移行（あるいは移動）の問題としてあるとともに、空間次元の不連続性（競合・対立などのシステム間の関係）の政治学（＝戦略ゲーム）の指摘であった。予期的社会化が当該の個人にとって、あるいは当該の社会システム（所属集団）にとって、さらには将来の参加を望む社会システム（準拠集団）にとって、それぞれ異なる機能（帰結）をもたらすということをマートンは、すでに明確に指摘していたのだ。

マートンはいう。「将来を見越した社会化は開放的社会体系の中にある個人にとっては機能的であろうが、彼が所属している当の集団、階層の連帯性にとっては明らかに逆機能的である。というのは、別の集団がもつ対照的なモレスに忠誠をちかうことは、内集団のモレスに背反することを意味するからだ。だからこそすぐ分るように、内集団は或る種の外集団規範へのかかる積極的な指向に対して、あらゆる社会的拘束を加えようとするのである」（同上訳書、244頁）。

内集団とは、ここでは所属集団を指し、外集団とは準拠集団を指す。本稿の用語では、所属集団が社会化システム（あるいは、現にある社会）であり、準拠集団が社会システム（あるいは将来の参加を目指す未だ見ぬ社会）となる。階層移動を例にとろう。予期的社会化は、現に所属する階層（地位）の価値に同調せず、将来の参加を望むより高い階層、あるいは稀にはより低い階層（地位）の価値にあらかじめ同調しようとする過程のことである。

そのような事態は、社会システムとしての現階層にとっては、その凝集性の確保や、あるいは統合の維持にとって逆機能的になるということである。個人にとっては、より多くの資源獲得（地位の上昇）をもたらすかもしれないし、全体としての社会の発展（近代化＝社会全体の資源の量的・質的拡大）にも貢献しうるものともなろう。しかし、同時にそのことの帰結として、社会化が営まれる現にある社会は、いわば、過去のものとして置き去りにされることになったのである。〈出自（階層）のための社会化ではなく、到達（階層）のための社会化〉である。

社会化システム（＝家族）は、将来参加しようとする社会システム（＝準拠集団）への適応には熱心であったが、社会化システムの基盤としての、現にある社会システ

ム（＝所属集団）の維持や充実は軽視され、看過されることになった。先述の〈籠城主義〉は、「よくない所・あぶない所（＝現にある社会システム）にやらない」のであり、それらよくない所・あぶない所を制御しようとする態度からは、はるか遠くに離れてしまっていたといえるだろう（社会化の手段・環境としては問題にしたが、社会化の目標・ターゲットとしては問題としない）。

マートンは、先の引用に見るように「内集団は或る種の外集団規範へのかかる積極的な指向に対して、あらゆる社会的拘束を加えようとするのである。」と述べた。しかし、近代化の過程とは、過去から時間的に配列された社会システムが、その順番で優先順位が上がるようにシステム間の序列付けがなされるということであり、内集団（現にあるシステム）が、外集団（将来のシステム）に向かって離脱しようとする指向に対して、社会的な拘束を加えようとする経緯には、時代的・文化的差異が種々（ズレ、タイムラグ、混乱など、たとえばラッダイツ）あったとしても、そうしたより過去の社会システムの抵抗という営みは、結局は失敗に終わるしかなかったといっていよう。つまり、参加的社会化に対する予期的社会化の勝利である。

教育家族の誕生とともに、個人を社会システム（＝地位）に埋め込む、あるいはつなぎとめるという、固定し係留するための社会化ではなく、個人が社会システム（＝地位）を移動しあるいは上昇するための社会化が支配的な価値となっていたのである。たとえば『坂の上の雲』をめざした社会化である（〈雲〉は、現にある確かな社会、つまり〈坂のふもと〉よりも、不確実な社会化の目標であるに違いない）。

(4) 潜在的社会化効果と顕在的社会化効果

社会化システムが、その基盤である社会システムから剥離されたといっても、言い換えれば、社会化システムとしての家族が、社会から〈籠城〉したとしても、現にある社会の社会化効果が消滅したわけではない。現にある社会は、参加的社会化の場としての顕在的な社会化の機能を失ったが、予期的社会化の機関としての家族が位置づく社会的基盤として、潜在的な社会化の機能の重要性は変わらずに保持しているはずである。

しかし、社会のエージェントとしての社会化機関（家族や学校）が社会化のプロセスの近景として、浮き出ることに対応して、それを包み込む社会システムは遠景（バックグラウンド）へと退くことになったわけである。社会システムの社会化効果は、顕在的なものから（共同体による共同体への参加のための社会化）、潜在的なもの（共同体から隔離された家族による共同体からの離脱のための社会化）へと変化した

社会化とフェミニズム

のである。つまり、社会化の全体は、平板な構図から、遠近（〈遠〉＝社会システム、〈近〉＝社会化システム）の差の鮮明な立体的な構図へと変化したと表現できるだろう。

この変化のなかで、顕在的な社会化機関としての家族の社会化効果に注目が集まり、他方で、潜在的な社会化機能を有してはいるが、その効果が潜在的であるがゆえに、家族を取り巻く現にある社会の社会化効果を忘却するということにもなったと考えられる。社会化を見る人々の視線が、さらには学問的視線が顕在的な社会化に集中するのである。社会化のさまざまな現象は、社会システムの潜在的な構造的要因ではなく、社会化システムの顕在的な要因としての家族的要因、さらには（母親という）個人的要因に結び付けられることになる。

〈母原病〉という言葉が象徴するように、社会化における問題は、構造的問題としてではなく、家族（＝母親）の問題として、そこに主要な原因が帰せられることになる。まさに構造的要因は潜在化（遠景化）するのである。冒頭の引用文はそのことをも示している。

実際、問題は家族のなかで起こっている。たとえば、児童虐待の多くは社会から隔離された家族のなかでの現象である。教育母子家族が大衆化した戦後、高度成長期を経てのことになるが、コインロッカー家族（庄司洋子 1988）と呼ばれる家族の特徴は、都市の核家族の多くに当てはまるものであった。コインロッカー家族とは、都市のマンションに典型的な、ドアの鍵がかけられた家庭のなかで誰がいるか、何がおこっているかは、外部からは（隣でさえ）うかがい知れない、という孤立した密室としての家族を指している。そのなかで子どもたちが社会化を経験している。虐待があってもなかなか外からは見えないという状況の成立である。

このコインロッカー家族のなかで社会化の営みがおこなわれ、家族外の社会からは、その営みに対して介入不可能になっている。つまり、社会化システムとしての家族と、現にある社会という意味での社会システムとの乖離である。この乖離は、教育母子家族という規範とともに、都市の流動性や匿名性や利便性、あるいは家族の密室性などの構造的要因に大きく関わっているのであるが、社会化の問題が生じると、そうした要因は軽視されるか、忘れ去られて、社会化システムとしての家族関係や母親のありかたのみが強調的に問われることが多いのである。構造がもたらす閉塞性に導かれて、構造を所与とした閉塞的な研究（＝言説）が多く生産されるということにも注意しなければならない。

これに対して、庄司洋子（同上）は、1988年におきた「子ども置き去り事件」（非婚

の母子家族において、母親が愛人と暮らしつつ、子どもに送金してはいたが、14歳の長男とその妹たちだけで暮らすことになった結果、幼い妹の死にいたるまで事態が進んでしまった）について、社会的規範や上述した現代の都市および家族の構造的要因に注目して論じた。また、松村尚子（1985）は、現代社会を『構造的育児不能社会』と呼んで、その問題点を指摘している。それらは、現にある社会システム、すなわち家族を取り囲む現代社会が、顕在的な社会化を担うシステムとしてまったく不十分であることの指摘であった。社会化という機能を、現代の社会が果たせなくなっているということである。

3. 課題としての社会化システムの構築

これまで、教育母子家族の成立とは何であったかという問いを、主にマートンの準拠集団の理論や予期的社会化の理論をベースとして考えてきた。筆者自身はこの試みを、いわばマートン社会学のフェミニズム化（"Feminization of Merton's Theory!"）であるとも位置づけている。マートンのわれわれへの基本的な示唆は、問題（＝社会化という問題）を捉えようとするとき、一つのシステムの内部問題として画一的・一枚岩的に捉えたり、あるいはそのシステムの全体社会における付置状況を所与として捉えたりするのではなく、システム間の錯綜の問題として捉えるということだ。

この示唆に拠ってここまで、マルチプル・ペアレンティングの喪失（養育システムとしての社会システムの脆弱化、これについては渡辺 1997において、養育構造の複雑性と単純性というテーマで論じた）、連続から不連続へ、参入の社会化から離脱の社会化へ、参加的社会化から予期的社会化へ、固定から移動へ、社会システムの社会化効果の潜在化などといった、総じて社会システムと社会化システムとの乖離と呼ぶいくつかの仮説的命題を導いてきた。もちろん、これらの切り口は、一方から他方への単純な変化を表す軸としてではなく、交差する軸のなかでのさまざまな変移として社会化を捉えるための切り口であると受けとっていただければよい。そのことでマートン社会学のフェミニズム化の意義が拡がることを期待したいのである。

ところで、1920年代に萌芽を見、戦後高度成長期のなかで大衆化したといわれる教育母子家族、あるいは総体としての近代の養育構造は、不安定化し、揺らぎ出している。またそれが、先述の庄司などの分析に見るように、さまざまな問題の発生基盤となっている。そしてさらには、階層の再生産の議論に見られるように、同一階層への〈固定〉としての社会化が注目され、階層流動性に対する疑問が優勢な論点となっているのが、この20年来の趨勢である。「将来を見越した社会化は開放的社会体系の中にあ

る個人にとっては機能的で」(Merton, 同上訳, 244頁)あるが、閉鎖的な場合には異なる逆機能的な帰結をもたらす。移行を望むシステムが開かれておらず、しかし同時に、(階層的) 価値序列は不変である(移行を望み続ける)ことによる個人のマージナルな感覚はより一層高まり、アイデンティティ不全感をもたらす。

この揺らぎや問題の深刻化が脱近代への大きな変化の圧力の一環であるならば、問われているのは新たな養育構造の模索であり、構築である。そして、本稿の議論の展開からすれば、社会システムと社会化システムとのオルタナティブな結合のなかに、新たな養育構造の可能性を求めるということになる。その結合(重なり)の様相は、もちろん前近代とは異なる。社会システムを再び顕在的な社会化システムとして新たにたちあげることである(これについては、渡辺 1994を参照されたい)。

新たな養育構造は、システム間関係の相対化、そして性別分業型夫婦規範や職住分離型生活、言い換えれば生活時間と生活空間の性別分離構造を含む、社会システム全体の構造を相対化したうえで、構築される。社会化システムの社会的構築は、フェミニズムの課題であると同時に、教育社会学の緊要な課題であると考えられる。

〈文献〉

- Abbott, P., & C. Wallace 1990, *An Introduction to Sociology*, Routledge.
- Benedict, R. 1938, 'Continuities and Discontinuities in Cultural Conditioning', *Psychiatry* Vol. 1 pp. 161-167.
- 深谷昌志 1981, 『良妻賢母主義の教育』増補版 黎明書房。
- Gordon, L. 1986, 'Feminism and Social Control' in Mitchell, J. & A. Oakley (eds.) *What is Feminism ?* Basil Blackwell pp63-84.
- 原ひろ子・我妻洋 1974, 『しつけ』 弘文堂。
- Mead., M. 1961, *Coming of Age in Samoa* (畑中幸子・山本真鳥訳『サモアの思春期』蒼樹書房 1976)。
- Merton., R. 1957, *Social Theory and Social Structure: toward the codification of theory and research* (森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房 1961)。
- 松村尚子 1985, 「構造的育児不能社会の中で一現在の母親の呻吟と本来的な母性の回復をめざして一」, 脇田晴子編『母性を問う一歴史的変遷一(下)』人文書院 250~280頁。
- 沢山美果子 1984, 「近代家族の成立と母子関係一第1次世界大戦前後の新中間層

- 」, 人間文化研究会編『女性と文化 Ⅲ』JCA 出版 117-144頁。
- 1990, 「教育家族の成立」『叢書 産む・育てる・教える 匿名の教育史 1 巻 〈教育〉誕生と終焉』藤原書店 108~131頁。
- 庄司洋子 1988, 「現代家族の福祉ニーズ」『ジュリスト』No. 923 12-20頁。
- 鈴木智道 1997, 「戦間期日本における家族秩序の問題化と「家庭」の論理」『教育社会学研究』第60集 5~22頁。
- 牛島義友 1955, 『家族関係の心理』金子書房。
- 渡辺秀樹 1989, 「家族の変容と社会化論再考」『教育社会学研究』第44集 28-49頁。
- 1994, 「現代の親子関係の社会的分析—育児社会論序説—」, 社会保障研究所編『現代家族と社会保障』71-88頁。
- 1997, 「家庭の養育環境の複雑性と単純性」『教育と医学』45巻7号 44-50頁。
- 山村 健 1966, 「ソーシャライゼーション」『教育社会学研究』第21集 105-117頁。
- 山村賢明 1971, 『日本人と母』東洋館出版社。

ABSTRACT

Socialization and Feminism

WATANABE, Hideki

(Keio University)

2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo, 108, Japan

This paper discusses the meanings of monopolization for the role of socializer, ie., child carer and also primary or nurturant socializer in the modern family, especially mothers.

In modern societies, 1)the socialization process has become more discontinuous than in that of pre-modern societies. Children have their socialization experience not in the whole societies in which they live, but in their own families that are formed as isolated socialization systems. 2)The mother has held the monopoly for the role of parenting. Societies have lost the mechanism of "multiple parenting" and also the device of "social uncle". 3) Anticipatory socialization has become the main process as opposed to participatory socialization. 4)In modern societies, the purpose of socialization is for mobility, ie., upward mobility in social stratification; anticipatory socialization is suitable for mobile societies. In other words, socialization is used not for ascription, but for achievement.

As a whole, we can say that modern societies have lost their manifest function of socialization, although they have important latent or implicit effects upon socialization. Now, in contemporary societies changing toward the post-modern era, societies require us to construct a new socialization system to build a new manifest function of socialization, not monopolized by the family or by mothers, but taken by multiple socializers in broader societies as a socialization system.